

BPW Newsletter JAPAN

Official Newsletter of National Federation of Business and Professional Women's Clubs of JAPAN



BPW 日本 エジプト交流報告

2007年5月20-22日 カイロ/エジプト

報告 黒崎伸子(日本BPW連合会会長)

2007.8.1
Vol.89

CONTENTS

〔特集〕

エジプト訪問記

- ・エジプト訪問の目的
- ・訪問レポート
- ・参加者の感想
- お知らせ
- 新クラブ誕生
- 関東山梨ブロック研究会報告

エジプト訪問の目的:

昨2006年秋、日本BPW連合会が第18回日本・ヨルダン・エジプト・パレスチナ女性交流プログラムの中心団体として上記3カ国を訪問した際、エジプトでは、BPWエジプト会長から「2007年度のアフリカ・アラブ地域会議へ日本から多数参加してほしい。その場合、会議の同時通訳も考えていい」という強い呼びかけから始まった。また、この交流プロジェクトのエジプト側窓口のNCCM(国家母子評議会)からは、NCCMが進めている女の子のための学校への支援要請もエジプト訪問への後押しとなった。

さらに、日本BPW連合会・特に長崎では、2月に中東代表団を受け入れたことを契機に「エジプトにいこう」の声がでて早速、ツアー計画がたてられた。しかし、直前になって、地域会議の日程変更が伝えられたが、すでに航空券などの手配が終わり、帰国後の仕事の日程調整も終わっている。この時点で変更は無理との判断で、BPWエジプトの関係者と会談すること、NCCMの学校を視察し説明を聞くことを柱に切り替え、多くの未調整分をのこしたままの旅となってしまった。

しかし、それなりに有意義な出会いや意見交換があった。以下、簡単に報告する。

参加者: 黒崎伸子(連合会会長)、
平松昌子(東京クラブ、連合会前会長)、
古川友子・山本和子(和歌山クラブ)、
神谷公子・佐野純子・鶴田雅子(長崎クラブ)
計7名+1名(佐野さんの長女)

黒崎・平松以外のメンバー6名は5月15日に日本を発ち、先にエジプト南部のルクソールなどを観光して5月19日に全員がカイロで合流した。それ以降の準公式事業のみを記載する。[]は参加者

5月20日(日) 在エジプト日本大使館訪問[平松、黒崎]

日本の現地窓口として本・女性交流事業を担当している蓮池理事官と面談した。完成したばかりの「第19回交流活動報告書(2007年2月)」と前回「第18回報告書」(昨秋実施、報告書は外務省より現地に発送を依頼済み)を持参したが、#18の前回分もまだ入手していないとか。「#18」と「#19」報告書を直接手渡ししてその評価などについて意見を交わした。

事業を突り多いものにするためにも、関連情報は多い方が良いという中で、国連 NGO 国内婦人委員会の窓口としてこの事業に関わっている平松から、第20回、21回交流事業の実施時期などについて非公式ながら、これまでの動きを説明し、意見を求めた。

日本BPW連合会ニュースレター

発行人: 黒崎伸子 広報委員会編集

日本BPW連合会 事務局

〒160-0023

東京都新宿区西新宿 3-5-12-116

TEL.03-3348-7644

FAX.03-3348-7648

E-mail=pub@bpw-japan.com

ホームページ URL

http://www.bpw-japan.com

時期については、外務省としてはラマダン前が好ましいようだ。現地大使館は、ラマダン前に引っ越しが予定されているので、ラマダン前は忙しくて十分な対応は無理だろう

訪問テーマなどについては、交流の主たる実行団体が日本YWCAになる予定で、教育問題に関心をしめしていること、特に女兒への初等教育を考えているようだ。教育問題(高等教育ではない)は、こちらのテーマとしても関心事なのでよいのではないが

情報交換の重要性について、特にデータに基づく意見交換を重視する方向なので、事前にそうした資料があれば印刷配布できるので協力してほしい。

できる限り協力する方向で

= この後、大使館からホテルまで歩いた。排気ガスと砂埃と、熱気とが押し寄せるが、ナイル川にかかる橋の上には、気持ちよい風があった。

5月21日(月) NCCM 訪問・学校見学【日本から全員】

NCCM(エジプト国家母子協議会)訪問は、学校支援の可能性を探るためにも必要であり、今回のツアーでも当初より、NCCM の広報・渉外担当 Helmy氏を通して調整をすすめてきた行事である。また、#19交流(2007.2/3-10)の来日メンバーであった Sara Azzazy には、今回のツアー参加者の多くが長崎で親しくしたこともあり別途連絡をとった。その結果、午前10時半に母子評議会を訪問することで、学校見学も含めた一連の日程が準備された。



(写真:エジプト国家母子評議会にて)

10:30~ Sara Azzazy と再会。NCCM の広い応接室

で出迎えをうけた。会議室が目下使用中なので、この時間を利用して、Sara 自身が書いて、エジプトの First Lady・ムバラク大統領夫人にも提出したという報告書をパソコンの画面で見せてもらった。日程に沿って、写真を入れて記載しており、非常にわかりやすいものになっていた。容量が大きすぎメールでは添付できな

ったというので、CDにコピーしたものを受け取った。(でも、これが入っておらず、翌朝再度やり直してもらうことになるのだが)。来日に際して彼女から提出された履歴書には NCCM において児童労働問題の調査や支援事業の評価を担当しているとあったが、改めて、彼女自身が NCCM の中で特に取り組んでいる仕事についての説明をきいた。

NCCM が取り組んでいる子どもの問題には、児童労働の問題、障害児を含む児童の健康問題、ストリート・チルドレンの問題などがあり、**世銀および EU などからの支援**で、データ収集・評価をして、事業を企画している。これらはほとんどすべてが貧困に起因しており、正確な数字はつかめていない。貧困は増加傾向にあり、学校に行けない子、稼ぐために街にでる子、子供たちの健康や暴力の被害など、問題も増加している。

NCCM が取り組むさまざまな問題とこれを支援する世銀やEUからの支援、さらにその評価に関わっている Sara の役割を聞きながら、まだ20代の若さで彼女が昨年度 NCCM 代表として日本に派遣された理由も納得できた。この中で、ある例として、障害児への取組みの一環として、一人障害児を生んだ母親を医学的に検査し、さらに障害児が生まれる可能性がないかどうかを調べる機械を購入して、事業を展開しているとの話があった。つまり、障害児がいることは社会から排除される、あるいは、家族の経済負担が増えて貧困につながるということで、障害児へのプログラムにも、彼女は深く関わっていた。

12:00~ NCCM 各事業部門担当者からの説明と意見交換会

事務局長 Khatlabさんがジュネーブでの会議出席で不在のため、事業局長(Program Director 昨秋は広報担当) Helmyさんの司会で、次々に各担当者からの説明を受けた。それぞれ5-10分程度。同行者のために、黒崎が通訳。日本からの参加者との質疑応答もこなせた。(それぞれの責任者の名前は名刺交換する時間がなかったため、現時点で詳細不明である。)

席には、「Girls Education」とタイトルを付けたフォルダーがあり、中には、NCCMが取り組む様々な課題についてのパンフレットがあった。NCCM について、子供の危機対策計画、児童労働保護の試み、薬を克服するために、若者支援事業=これにはイタリアの協力でのタイトルも、FGM追放のモデル事業、FGM追放カイロ宣言(2003)、子供の権利条約についてなど。

1) 女兒教育に関するプラン:

計画の目標は、初等教育における男女格差を解消し、

すべての子どもが学校に行けて、さらにドロップ・アウトしないことを目指す。そのために、予算も支援も地域密着方式を採用する。計画では、少女に優しい学校を、5つのプログラムに従って7つの地域に作ることに取り組む。貧困のために学校にアクセスできない女児たちに教育の機会を与える取組みを2002年から始めた。最初の2年間は調査・企画を行い、現在、6～13歳の女児を25～35名規模で集めて教育する学校建設を行っている。政府はもちろん、EUや国際機関やNGOや国内外の企業等からの支援で、これまでに約700の学校ができる見通しがたっており、最終的には1000校で100,000人レベルの生徒に教育の機会を提供したい。特徴は、地域に根付いた場所となるために、建設前から地域ボランティアの力を借り、また、教師を雇うのではなく、地域に住むある程度の年齢の人たちに訓練を受けてもらい、facilitator(指導者)として、少女たち自身が自らで学ぶ手助けをしてもらうユニークなシステム(Active Learning = 実用教育)である。教材なども地域にあるものを利用する。地域によっては、男児の受入れも可能(女児が75%以上の条件)であるが、実際には90%以上が女児である。他には、子どもの教育に関するデータベース集計、地域の人々に教育の必要性を理解してもらい取組み、監視・評価も行っている。

・上記内容に対し、この学校を卒業した後はどうなるかという質問があった。

(回答)この学校はあくまでも基礎教育を与える場だが、これまでの実状から、一度、教育の機会に一定期間恵まれると、多くの女児がさらなる中等教育を求めることが多い事もわかっている。基礎教育が終わってれば、その後の就業の機会や社会的参加への基本的考え方も備わるという利点を大切にしている。

2) 家庭内の問題に関する法的な取組み:

2004年から始めた比較的新しい事業である。これまで個人的問題として放置されてきた事柄を解決されるような法整備を目指している。特に、女性や子どもはさまざまな権力の犠牲になりやすく、そのような人々を救済するシステムの手始めとして、全国規模でのカウンセリングを始めた。地域のNGOやボランティアと協働して、各県に事務所をおき、ソーシャルワーカーや心理療法士、法律の専門家が常駐するようになった。また、これらについて、地域の人々に知ってもらう必要がある。これらの背景には、子どもの権利への認識不足、貧困があるが、貧困のために家族内に争いがおきて、離婚や地域社会からのドロップ・アウトはさらに、貧困を生み出すという悪循環の背景でもあり、これらを遮断するためのひとつのアプローチだと考えられている。

3) 思春期の健康への取組み:

UNFPAとの協働で10～19歳を対象に行っている。主として、生殖に関わる健康に主眼をおいている。社会的宗教文化的バリアーを崩すのは難しい。例えば、女性性器切除や結婚にまつわる慣習(早婚、近親婚、重婚など)、女性への暴力等について、それらの正しい知識を早く提供することで、問題解決につながる。つまり、若い年代自身のmotivationと、草の根レベルのNGOや学校などの協力が大きい。エジプトでは、エイズ、肝炎などが大きな問題である。具体的には、小中学校からの教育、対象年代のニーズに即したサービス、地域社会の理解・教育を得て事業を展開し、さらには、国レベルでの政策提言などを目指している。

4) チャイルド・ヘルプライン:

子どもに対する暴力や学校・家庭あるいは地域での問題を解決するために、各行政機関やNGOが協力して行っている。1日24時間、週7日間いつでも対応しており、本人の心理的問題解決や家族とのカウンセリングを行っている。これらの約6割は家族内の問題であり、全国各地での状況を2ヶ月に1回に集まって検討して、今後の取組みを再検討している。

5) ストリート・チルドレン:

全省や多くのNGO、企業の協働で行って、前述のチャイルド・ヘルプラインにも関係している。実際の数字の集約が難しい。まず、このような子どもたちを麻薬から守るために、NGOや警察・マスコミ等の協力を得て、認知を高める活動をしたり、内政省ではこのような子どもたちに対応するマニュアルや必要な設備・器具の整備をしている。また、彼らはヘルスケアへアクセスできないための健康・衛生問題も発生しており、これらのケアも行っている。ただ、この背景には貧困のために学校に行けずに路上に出て行く者、地方から都会へ移住・移民した家族からの脱落、そして、さらに貧困にいたるといことがある。

6) 広報活動への取組み:

人々や地域社会に対する認識を上げるための活動・・・若い世代に対しては、間違っただけに対して“NO”ということの必要性を認識させ、間接的差別や障害が表に出てくるようにしている。これらには、地域社会自体の改革も求められるが、NCCMでは“THINK TWICW Project”と名づけて取り組んでいる。つまり、top-downではなく、トレーニングを受けた同年代のグループや同レベルの人々がマニュアルに沿ってさらに訓練を受け、それらの人々が地域のリーダーとなって、対象となる人々により近い立場で知識を広め、意識改革を行っていくのである。

伝統的文化宗教的問題に対する活動・・・例えばFG

M(女性性器切除)などについては、ある意味では敬意を持って対処する視点ももたなくてはならない。国家的政策として展開できるものであるのか、あるいは草の根レベルを主体としてやったほうがいいのか、いずれにしても、手段としては子どもたちを集めてキャンプをしたり、テレビでアニメ上映をしたり、NGO関係者やボランティアたちを集めて研修をするなどである。

これだけの内容をNCCM側からは、覚えているだけでも8名が説明して、相互の意見交換(質疑応答)を通訳しながら1時間20分くらいで行ったのであるから、その充実度はおわかりいただけるだろうか。最後には、日本からの参加者全員にNCCMからのお土産を頂いた。

14:00~ One Room One School Project 学校訪問:(Sakkara地区)

前回、第18回日本-中東女性交流プログラムで訪問した学校と同じであったが、その間、ブッシュ大統領夫人の訪問などもあって、少女たちのレベルはさらに上がっていた。生徒はNCCMのマークの入ったお揃いのTシャツを着て、まずは、今日のリーダーの歓迎の言葉のあと、全員で2曲を合唱。そして、4つのテーブル(クラス)を回って説明。芸術のテーブルでは、粘土(セラミック?)で作られたカラフルな蠟燭立てを頂いた。机には、日本の国旗も作られていた。家から持ってきたというビニール袋で作ったポシェットなども…。社会科学のテーブルは、今日は地理の勉強。上手に色分けして書かれたエジプトの地図についての質問に誰かが答えていく。「エジプトで一番古いモスクは何ですか?どこにありますか?」…。国語のテーブルでは書き取りの練習。算数のテーブルでは掛け算…。

日本からは、元保育士が糸電話や風車の作り方を教えると張り切っていたのだが、既に彼らは、習得済み。でも、折り紙での紙風船づくりは、大いに盛り上がった。まずは、正方形の紙をどうやってつくるかから、始めなくてはいけなかったが、折りあがって、「フー」と息を吹き込んで膨れあがると、みな大喜びであった。最後は、裏庭に全員で写真撮影。



(写真:1 学校1 学級プロジェクトの学校にて)

15:00~ NCCM 招待・昼食会 於:ナイル川上レストラン

NCCMからはHelmyさんとSaraが出席。観光組は、初めて皆が満足するおいしい食事であったと、大感激。さらには、エジプト(アレキサンドリアやアスワン地方など)のオリエンタルなダンスを鑑賞し、また、多くの人がダンサーの誘いによって、舞台上踊るといった楽しい時間を過ごした。Helmyさんからは、日本からの素晴らしいダンサーが来たとお褒めの言葉を頂いた。

19:30~22:00

BPWエジプト会長との夕食会 於:Le Pesha(ナイル川に浮かぶ船の中のイタリアンレストラン)

【佐野さんのお嬢さんを除く全員が参加】

前日の真夜中にケニアから帰国したDr. Amany Asfourは相変わらず元気で明るい。こんなバイタリティ溢れる彼女を、一人でも多くの日本BPW会員に紹介し時間を作ってほしいと願って設定された夕食会であった。BPWアフリカ地区のコーディネーターとして、会合を準備し、日本からも参加してほしいと私たちに強く要望していた。今回の訪問はそのために計画されたのだが、その日程は諸般の理由で延期され、その連絡がおくれたので、旅行の日程変更が間に合わず会合への出席は不可能となった。

「リ・ジョナル・ミーティングの日程が変更になって、本当に申し訳なかった」として、アフリカ全土やアラブ地域のBPWの会員に合わせる事ができないことを残念がっていた。エジプトには、まだ全国で3クラブ(カイロ内に事務所)しかないが、すでに会員は100人を越えたとのこと。会員は全国に散らばっている。また、ケニア・南アフリカはもちろん、スーダンやエチオピアなどアフリカ内13カ国にクラブをつくり、アラブ諸国にも広めている。また、医師の本業は辞めて(できなくなって)、医療器械の販売の事業を中心に活躍しており従業員も40人で安定した業績を上げている。事業のためにアフリカ各地を回る際BPWの組織活動をしているとも。

2014年にカイロにBPWIコンgressを誘致したいとの必死であるのも感じとられた。BPWIアフリカの姉御的存在である。2時間ちょっとの短い時間ではあったが、週明け(エジプトでは金・土が週末)の5月28~30日のリ・ジョナルミーティング準備に忙しく、会食中も2個の携帯電話が途切れなく鳴っても、いつも笑顔で対応して、逞しい彼女に再会し、貴重な時間を持つ事ができた。船の窓から見える夜のナイル川は周りのネオンを反射して輝き、漁をする船が静かに影をみせていた。

エジプトにBPWが誕生したのは、比較的新しい。第5回の中東交流(1998)で、はじめてエジプト代表が来日しBPW仙台クラブが一行を迎えた際に、訪日団の団長をつとめたDr. Guindi(当時NCCM事務局長)

が、BPWの活躍を評価し「エジプトにもこうした女性団体をつくりたい」と話されて、BPWIの資料を送付した記憶がある。その後数年して誕生した。イタリアのBPWとは交流も深く、最近ではアフリカ地区に留まらず、ヨルダン(従来、アジア太平洋地区に所属)も含め「アフリカ・アラブ」としての連携を深めつつある。(平松)



(写真: Amany Asfour 氏 BPW エジプト会長・BPWI アフリカ地域リージョナルコーディネーター)

5月22日(火)

10:50 ~ 12:30 カイロ大学医学部訪問【平松、黒崎】

2006年11月にカイロを訪問した際の昼食会で私の隣席になられた Madiha M. Khattab 氏に日本出発前に連絡をしておいたのだが、彼女はすでに医学部長を辞されて、さらにお忙しい立場に就いておられた。彼女の手配で、医学部で新しい医学部・学部長(女性)と会うことになった。

Nadia Elfeky 医学部学部長は忙しい職務の間に時間を作ってくださった。名刺を交換しながら、私が外科医と知ると、早速、カイロ大学医学部・初の外科教授になったという女性まで呼び出してくださって、話は大いに盛り上がった。ただ、もうひとつお願いしていた女子医学生との懇談は、ちょうどこの日が、口答試験と筆記試験の間で学生は登校していないということで、実現しなかった。

カイロ大学医学部の学生数は、男女ほぼ同率であり、卒業後の初期研修(卒後2~5年)のスタッフの中では、女子学生のほうが成績が良いという理由で、女性の占める割合が高い。特に、小児科・皮膚科・眼科・産婦人科などにおいては、スタッフの60~80%を女性が占めている。また、これらの分野以外に、基礎医学(解剖学・生理学・生化学など)でも女性教授をたくさん輩出している。しかし、一方で心臓外科・脳外科・整形外科・泌尿器科などは、いまだに女性への扉を閉ざしている。ただし、一般外科には数名の女性スタッフがあり、偏見・差別と戦いながら、何とか地位を

確保しつつある。(そこで、外科部門の Salma Dowara 氏が遅れて話し合いに参加することになった。)

医師になるための学生教育や卒前・卒後教育は国によって異なるので、簡単に説明してもらったが、まず、入学については、公立大学に入学試験はなく、高等学校で相当のレベルを修めていれば入学できる。(私立大学に入学するのにハイレベルはいらないが、学費がかなり高い。)そして、6年間の医学部教育(講義3年+臨床実習3年)の後に、研修義務1年(内科・一般外科・麻酔科の必修+2科の選択)の後、自分で選択した専門分野に進む。医学部は1学年が約500~600人(最近マレーシアからの留学生約100名を受け入れることになった。と、卓上には細かな受け入れに関する取り決めの文書があった)と大人数なので、授業や試験もスタッフには大変な負担になる。卒後研修は、カイロ市内にある癌研究所・こども病院・救急病院・婦人科病院など9つの専門病院や他の地域の病院で研修を行う。

イスラム教徒の女性にとっては、産婦人科領域では男性の診察を受ける事に非常に抵抗があるために、産婦人科の女性医師は学問的にも経済的にも成功している人が多く、エジプト各地で活躍している。しかし、Elfeky 氏ご自身は、個人的には、ある分野で女性医師が優勢を占めて、アンバランスになることには賛成できないとのことであった。

途中から話し合いに加わった外科医の Dowara 氏は大学で講義・診療をする傍ら、市内でも個人のクリニックで診療を行っている。これは、エジプトの大学病院に勤める医師たちはみな同様で、特に個人のクリニックには、女性医師への診察を希望して患者がくるために、男性よりも成功するという。さて、Dowara 氏は外科医になって8年(初期研修終了後)、研修時代はさまざまな差別があり、男性の倍以上働いた。どんな差別かというと、学位取得のための研究はもちろん、論文や学会発表などには上司(トップの教授も含む)の指導をうけなくてはいけないが、いつも男性医師たちの後回しにされたなど。従って、地位を得ていくためには、トップの地位についている男性たちが、女性医師をどう支援するかが鍵であり、また、家族の理解・支援も必要である。両氏ともに、父親が娘がよい成績を修めて医学部に進学することを大いに喜んでくれたし、卒業後には夫たちが研究に専念できる環境をつくることに協力してくれたそうである。女性医師の夫たちの中には、子どもを置いて海外の学会に行く事を反対する人もいて、そうなるといういいポジションには就けない。

エジプト南部の貧しい地域の出身だった Elfeky 氏の祖父は、彼女が医学部の学生になったというだけで、

彼女を「Doctor・・・」と呼びかけ、卒業すると、将来は祖父が出た町にクリニックを建ててあげるから、そこで働いて人々を助けて欲しいと期待されたというから、凄い。まさに、日本でいう“故郷に錦を飾る！”である。

カイロ大学には20学部あり、そのうち4つの学部長（医学、看護学、メディア、コンピューター・サイエンス）が女性である。100年余りの歴史があるが、ここ数年は各学部でも女性スタッフの割合が増え、トップに近い地位を女性が占めるようになってきているという。その理由は、それらの決定に関与する前職や政府関係者、そして、ムバラク大統領夫人の影響も大きい。

とにかく、お会いした瞬間は、「忙しくて十分な時間

がとれずにごめんなさい」というので、こちらも気にしながらの対応であったが、話はどんどん盛り上がり、1時間半余りになった。面談中も何度か急ぎの書類が持ち込まれていたが、面談を終えて部屋を出ると、廊下は行列をなす状態になっており、申し訳なかった。しかし、両氏ともに私たちとの出会いを大変喜んでくださり、これからも大いに情報交換をして、女性の力をつけていくためにいっしょにやりましょうと熱く手を握ってお別れした。

以上、簡単であるが、今回の訪問での懇談の内容・状況を報告した。

参加者の感想

【B.P.Wながさき 佐野純子】

2月の日本 - ヨルダン・エジプト・パレスチナ交流会から、あつという間に話がまとまり、5月15日～23日までエジプトを訪問してきました。当初は地域会議の日程と合わせての予定でしたが、直前に会議の日程が変更となってしまい会議への参加はできませんでした。しかし、黒崎さんのご尽力で母子評議会や学校の訪問、エジプトB.P.W会長との会食など有意義な時間を過ごすことができました。また、2月に日本を訪問されたサラさんにも再会することができました。観光の様子もあわせて報告します。

母子評議会・学校訪問

母子評議会を訪問し、そこで働く女性の方たちにお話を伺いました。ストリートチルドレンや子供の労働、法的な支援、思春期の子供たちへの指導、教育援助など、多くの女性や子供に関する問題に取り組んでいる様子をそれぞれの担当の方が熱心に話されていました。その中で印象に残ったことの一つは、子供同士で教え合うシステムを上手く活用しているということです。エジプトでは子供たちの間でいろいろな問題が起きた時に、その解決を大人がやるのではなく、子供たちの中にリーダー格の子を育て、その子供が周りの子供たちに教えていくようにしているという話でした。

訪問させてもらった学校でも、大人が教えるのではなく、グループに今日のリーダーの子供がいて、その子の進んで授業が進み子供同士で教え合うのです。大人が上から教えるのではなく、子供同士で良い影響を与え合うようにしているように感じました。

もう一つは、多くの問題の根底に貧困があるということです。町には多くのストリートチルドレンがいるそうですが、その子供たちは家庭が貧しいためにそうなっているとい

うことでした。その子供たちだけをどうにかしようとしても解決しない。その子供たちの家庭の問題を解決しないと、その子供は家に帰れない。そして、その問題のほとんどは貧困であることのように思いました。評議会の方たちはストリートチルドレンの子供たちの家庭を訪問し、貧困の問題を解決しようと努力されているそうです。

子供たちと女性

ルクソール、アビドス・デンデラの観光ではたくさんの子供たちと会いました。観光で移動する道路の脇や遺跡の回り、畑で働く子供など。コンボイという護衛の警察車両が付いた移動では、観光車両が通過する時間が決まっているからでしょうか、道路の脇に立って車に手を振ってくれる小さな子供たちがたくさんいました。観光地で土産物売りのを手伝ったり、チップやバクシーシ(喜捨という意味だそうです)をねだったりするのは小学生くらいの子供が多かったように思います。ロバに乗って畑仕事の手伝いをする子供も多かったです。

エジプトではトイレの番人がいて、トイレに行く度にチップを渡さないといけませんでした。その役目を子供がしている所もいくつかありました。気球に乗る所では、ロバに乗った子供がやってきて、ロバに乗せてやるよ一緒に写真を撮っていいよとアピールしています。気球に乗る前に一緒に写真を撮ってバクシーシを渡したら、気球が下りてきた時にはもっとたくさんの子供たちが！一人に何かあげるとわらわらとどこから現れたのか他の子供たちが群がってきて大変なことに・・・

子供たちにとっては観光客にお金や物をねだるのが当たり前になっているようです。それから、女性に関して感じたことは、レストランや土産物屋などで働く女性を見かけることがとても少なかったということです。

カイロではホテルのレストランやお店で働く女性を見かけました。母子評議会でも多くの女性が働いていまし

たが、ルクソールなど他の所では、お店などで働く女性を見かけることは稀で、家庭の畑仕事をしている姿が見られるくらいでした。服装もカイロの女性たちはカラフルでおしゃれな服に身を包み、頭に巻くスカーフも付けていたりいなかったりでした。ルクソールなどの地域ではカイロより暑いということもあるのですが、黒のガラベイヤにスカーフを巻いた女性が多かったです。暑い地域で長袖に足まであるワンピースのような服装は却って暑そうですが、サラサラの綿で風通しがよく日差しも遮ってくれるので暑くないそうです。湿度が低いのでスカーフを巻いていることもそれほど抵抗なく、直射日光に晒されないのが涼しいようでした。

遺跡

エジプトで遺蹟といえばやはりピラミッド！今回の旅行の半分はピラミッド見たさだったことは否めません。ギザの3大ピラミッド、サッカラの最古の階段ピラミッド、ダハシユールの赤のピラミッドと屈折ピラミッド。ガイドさんの説明によると、ギザから南に全部で100基ほどのピラミッドがあるらしい。ギザのピラミッドはカイロから車で30分の所にあった。意外と近い。ピラミッドに相対すると、真っ青な空の中に見えるのは巨大なピラミッドだけ！さすがに凄い！！あまりの感動に自分の目に本当にピラミッドが映っているのが信じられない。5千年前に様々な知恵を駆使して作られたものを、今、目の当たりにしているのが信じられない思いだった。今回はギザの最大のピラミッド、クフ王のピラミッドに入場した。ピラミッドパワーのご利益を期待していたが、中腰で上るハードな登り道にご利益を感じている余裕は欠片もなし。下りてきたら体中から汗が噴出し、その後3日間筋肉痛に悩まされた。ピラミッドは果てしない砂漠の荒野に聳え立っているものというイメージだったが、振り返るとすぐそこに町並みがあり、スフィンクスの見つめる先は本当にケンタッキーフライドチキンだった。他の神殿などでも感じたことだが、エジプトでは遺跡が生活のすぐ側にある。遺跡とともに生活しているんだなぁと思った。

王の墓の中のレリーフは4～5千年前のものとは思えない色彩が残っていて美しい。棺に向かう通路は壁も天井もレリーフで覆いつくされていた。神殿などで特に古いものは戦いや自然崩壊、次の代の王に破壊されたりなどで、壁画は削られ神を象った柱の多くは顔がなくなっていた。その中でもカルナック神殿は圧巻でたくさんの巨大な柱の1本1本に見上げるような高い所にまでカルトゥーシュやヒエログリフ、絵などが施されている。オベリスクや王の像が聳え立ち壮大だった。神殿などに使われた石の多くは南のアスワン地方で切り出されたもので、雨季のナイルの氾濫にのせて近くまで運んできたんだそうです。そして、雨季になると仕事が出来なくなる農民を

集めて神殿などを作らせたという話でした。

カイロ考古学博物館はあまりに広くて、わずかな時間ではとても見て回ることができない。今回はミイラ室とツタンカーメンの副葬品をメインに。ミイラは怖いのもあると聞いていたが、びっくりさせられることは全くなく。どれもとても美しかった。表情によっては微笑んで見える王様もいたり、若くして亡くなった方は髪の毛まできちんと残っていた。巨大なワニや猫などの動物のミイラもあって、これはちょっと驚いた。

ツタンカーメンの副葬品はとにかく眩いばかりの黄金！マスクはもちろん、椅子もベッドも棺も、何もかもがきらびやかに輝いていた。博物館は見学できる時間が短かったのが残念だった。1日かけて見て回りたいくらいだった。

食事

旅行の前にエジプトのことについて調べた時、お腹を壊したという話を多く聞いたので衛生面は少し不安だったのですが、そう心配するほどのこともなく、結構何でも美味しく食べてきました。生水・氷・生野菜・カットフルーツに気を付けていたくらいです。

現地の方たちはあまり外食をするという習慣がないらしく、恐らく私たちが行ったレストランのほとんどは観光客向けのものだったのだと思います。なので、極端に癖のある味のものはありませんでした。独特の香辛料の強いサラダくらいです。

とても気に入ったのが、タヒーナというゴマのペーストをレモンとビネガーで伸ばしたものを。香辛料の強いものもこれをかけると和らいで食べられます。パンにもご飯にもお肉にも。何にでもかけて食べてました。母子評議会の方と食事した時に伺ったら、スーパーで売ってるということだったので、買って帰りたかったのですがスーパーに寄る時間がなく断念。

食事をしたレストランの多くはナイル川に係留された船の上で、バイキング形式のものでした。料理のメニューも似たり寄ったりだったのですが、どこもデザートはたくさん用意されていて何種類ものケーキ、クッキーのようなものなどなど。その中にきれいなピンク色のものが入ったボールが、何だろうと思って恐る恐る食べてみると、これが美味しい！今まで食べたことのないような食感なんです。日本の食べ物で言うなら、色つきの葛のような感じですが、茶色のものもあって、それはチョコレート味なのですが、ピンクは何味なのか？不思議な味でした。

たくさんの口バ

エジプトではどこに行っても、南のルクソールはもちろん、首都のカイロでも本当にたくさんの口バを見ました。恐らく各家庭に最低でも1頭は口バがいるものと思われま

す。畑への移動、帰りには収穫したものを積んで自分も乗って、荷車を引かせてスイカを売りに、と様々なことにロバが使われていました。自転車もちらほら見かけましたが、田舎の方では交通手段のほとんどがロバでした。100km/h 近くでバンバン飛ばす車の横を普通にロバが走っています。あのロバを撥ねたりせず、更にスピードも落とさずに走る運転手さんに驚きでした。遺跡まで向かう道のりの風景は、ほとんどが畑と川とその横の土手と椰子の木とロバでした。

カイロでは、スイカを引いてきたロバをいきなり道端に止めてスイカを売っています。路地とかではありません。たくさん車が走るメインの道路上です。ロバのスイカの後ろに車が止まって、男の人が降りてきたので、こんな所にロバを止めて！と文句を言うのかと思ったら、ロバの荷台の隅に付いた秤にスイカを乗せてもらっています。スイカを買うお客さんでした。

あんなにロバを見ることがこの先あるだろうか？と思うくらい、ロバを見ました。できれば1頭連れて帰ってきたかったのですが、飛行機に乗せるのが大変そうなので断念しました。

寝不足と強烈な日差しに疲れながらも、とても楽しい初海外旅行でした。憧れのピラミッドに感激し、エジプトで働く女性たちや学校の子供たちと触れ合う機会を頂き、9日間の旅を本当に満喫できました。BPWに入り、こういう機会に恵まれたことに感謝しています。今回は娘も同行させていただき、貴重な体験に参加させることができました。一緒に旅行して大変お世話になった鶴田さん、神谷さん、ありがとうございました。いろいろなセッティングにご尽力頂いた黒崎さん、ありがとうございました。

お知らせ

新クラブ誕生

7月1日に、東海クラブから新たに「BPW アイリス東海」が誕生しました。

会長は余語三枝子さん(連合会副会長)。アイリス東海クラブは、専門家の視点で教育分野に着目して研究を深め、関係機関に提言していき、同時に若手の育成に力を注ぎ、後進を育てることを目標としています。

連合会一同、アイリス東海クラブのこれからのご活躍に期待しています！新クラブの抱負などは、次号でご紹介する予定ですので、どうぞお楽しみにお待ち下さい。

西日本ブロック研究会ご案内

開催日時 2007年11月17日(土) 13:30~16:00
 開催場所 北九州市立男女共同参画センター“ムーブ”(予定)
 第1部 調査研究中間報告「働く女性の現状と課題」
 第2部 ヤングスピーチコンテスト「働く女性からのメッセージ」
 第3部 パネルディスカッション「働く女性へのメッセージ」

関東・山梨ブロック研究会報告

開催日時 2007年6月23日(土) 13:30~16:00
 開催場所 (財)津田塾会 503号室(渋谷区千駄ヶ谷)
 参加人数 会員:東京14名・武蔵野:3名・山梨:8名・関東:1名
 会員外:5名 合計31名

第一部 『ヤングスピーチコンテスト』

山梨クラブ推薦の1名と東京クラブ推薦の2名の合計3名が参加。それぞれが、仕事を通して将来の抱負や、職場で培った使命感や仕事の喜びを、そして平和について国際貢献したいという将来への希望を力強く語ってくれた。

最優秀賞は深澤夕紀さんに決定。

第二部 ブロック研究会

講演 『国際社会に求められる女性リーダーとは』

講師/大谷 美紀子氏:弁護士

2005年秋から国連総会・第3委員会に参加された大谷さんからは、ご自身の歩んできた学業・仕事・育児・国際貢献を通して、その中から見えてくる3つのキーワード『国際性』『女性』『リーダー』を基に「国際社会に求められる女性リーダーの要件」について語っていただいた。高次元からのお話のみならず、80年代一世を風靡した『アグネス・チャン』の子育て論に励まされてご自身も子連れ留学にチャレンジしてしまった！と言う、身近なエピソードも交えて、BPWIの統一テーマでもある「新しいリーダー」になるためのヒントをたくさん頂いた講演でした。

編集後記

「BPW日本 - エジプト交流報告」はいかがでしたでしょうか？世界中にいる BPWI メンバーと各国の活動内容について意見交換を行うことで、その国を知るだけでなく自国での問題を見つめなおすことができるのではないのでしょうか。最後まで読んで頂きありがとうございました。(二)